

- 4 -

しかし、一方オランダにおいてはインドネシア人留学生数十人によって結成されたインドネシア協会があり、以前には漸進的な政策をとっていたが、1922年に新綱領をかかげてオランダの支配に非協力の態度を明確にし、政治の民主化を要求するようになる。その幹部にはモハマッド・ハッタ、アリ・サストロアミジヨヨ、スナリオ、アハマッド・スバルジョ、イワ・クスマスマントリなど、インドネシア独立初期の指導者の名が多数見出され、規模は小さいにもかかわらず極めて重要な団体とすることができる。

1926年12月5日にこの団体を代表するハッタと、インドネシア共産党を代表するスマウンとがオランダのハーグでひそかに会合し、今後インドネシアにおける民族主義運動の主導権を後者から前者に譲るといふ密約を結んでいる。すでにオランダ人のこの問題の専門家ベトリュス・ブリュムベルヘルなどによってその密約の存在は指摘されているが、その後の研究者はいずれもベトリュスの要約に頼るだけで、原文の検討を試みたものはない。

発表者は1972年夏、オランダの内務省所蔵の旧植民省秘密文書ファイルの中でこの密約の原文に接し、またインドネシア協会側の関係者数人とインタビューを行なった結果、多少の新事実を加えることができるように思う。

インドネシア近代史研究の一考察 — インドネシア革命史序説 —

鈴木 佑 司

はじめに

インドネシア革命は狭義には独立宣言(1945・8・17)後四年に亘るオランダとの戦闘を言う。

そして今日に至る迄この戦闘の歴史的意義を巡る幾多の革命論が輩出した。それらはその都度の歴史的状況や議論の立場と分ち難く結び着いて居るにも拘らずインドネシア革命が広義に、即ち建国の精神や国家機軸の源泉として理解される因を成している。では何故この戦闘が就中革命ソボルンと言われるのか。更にインドネシア革命とは何であったのか。この疑問に答えるには「革命」の過程に立ち入った歴史的検討を欠せない。そしてより広い視野、即ち今世紀初めよりの植民地支配打倒と民族国家建設への諸運動の歴史過程の中で反オランダ戦闘が特殊に占める位置を明らかにする必要がある。その為、第一に民族主義と共産主義の合流と総括される反植民地闘争の指導層、組織、イデオロギーに関する政治過程、第二に一握りの革命エリートに限らず広く闘争の

参加者やその社会的基盤に内在する社会過程、第三に狭い意味の政治イデオロギーや社会経済の変動に歴史的意義を付与して来た文化過程に注目しなければならない。

I 反植民地闘争から革命運動へ

民族解放運動はまず伝統的支配層の中から擧出した植民地官僚層によって始められた。民族的
ムルデカ
 覚醒をしたこの一握りのエリートは高い教養と植民地支配の矛盾は民族独立によって解消しうる
ブルヒン アナン インドネシア アリアン
 とした。ブディ・ウトモ、インドネシア協会、更に国民党へと連なる諸運動はこの系列に属す
キアイ・ウラマ
 る。他方インドネシア社会での精神的權威を代表して来た回教指導層は植民地権力による社会、
 経済的抑圧に抗し、一方で植民地支配総体を否定し、他方彼等の大衆的基盤故に伝統支配をも変
サレカット・イスラム
 革する運動を展開して来た。イスラム同盟から後のマシユミとナフダトゥル・ウラマに至る諸運
 動がこの系列に入る。そして第三の系列は植民地支配の最も過酷な搾取を受けた労働者、クーリ
パモン・ブラジャ
 一、農民、下級官吏の利害を代表し、植民地権力と植民地支配層となったインドネシアのエリー
 トをも倒そうとする共産主義運動である。この系列の運動の指導層には下級伝統支配層出のイン
 テリヤ、回教指導層が加わっている。(共産党はイスラム同盟から分離、結成された。)これら
 系列の諸運動組織は度重なる植民地権力の弾圧により分裂を重ね、大衆を動員し得なかった。こ
 の状態で突然のオランダの敗北、日本軍占領という歴史変動が訪れ、運動は著るしく変容した。
スマンガット サビル
 濫乱する反西欧イデオロギー、戦争協力への大量動員、尚武精神と聖戦論という激しい政治の動
ブミンビン ピンピナン・ナショナル
 態化により、第一に民族独立運動の指導層は飛躍的に大衆動員力を得、民族の指導層へと変貌し
ピコラー・カヒラー
 た。第二に回教指導層も全域的組織と戦闘集団を得、政治勢力へと抬頭した。更に新たに軍事的
ブムダ
 準軍事的な集団や独立運動のサブリーダーとして大量の青年が政治世界に躍り出た。このいずれ
 の系列にも属さない新たな政治主体こそ、日本の敗北と状況の急展開の中で著るしく政治化を遂
 げ、既成の指導層を突きあげ独立宣言を強行させるに至ったのである。軍政下で貧窮化する大衆
ブラサアン
 に心情的に最も近いこの青年層は既成の指導層との対立を孕みながら再植民地化を目論むオラン
 ダ軍との戦闘の最も重要な荷い手となるのである。だがこの格段の政治意識の昂揚は、己れの地
 域社会の文化的紐帯に支えられた権力構造を打倒して遂げられたのではなく、目前の社会的悲惨
ルサンチマン
 に対する同時的自然発生的憤懣に基づき、他方その政治意識を政治運動へと領導する指導を欠く
 。。。。 プーラン・ク・カンボン
 スタイルであった故に次第に分裂を重ね、急速に衰え、「大帰郷運動」に転じてしまうのである。

II 「革命」—おわりのはじまり

従来のイデオロギー、組織、指導者の系列化を覆い隠す迄の青年層のラディカルな戦闘が民族
 独立を死守しながら遂により根源的な社会的悲惨を解決しえなかったのは彼等自身が政治プログ
 ラムを持たず、寧ろ「革命」の指導争いに巻き込まれ分裂を重ねたことによる。「革命」指導を

